



第126回テーマ 文化遺産としての 六甲山ホテル旧館

- 建物の歴史と背景
- 建物のデザイン上の特徴
- 設計者古塚 正治のこと



六甲山ホテル旧館正面



講師：笠原 一人さんプロフィール
1970年(昭45)、灘区出身・在住。
1998年京都市芸繊維大学大学院博士課程修了。2010-11年オランダ・デルフト工科大学客員研究員。近代建築史・建築保存再生論専攻。日本建築学会近畿支部近代建築部会主査。DOCOMOMO Japan 幹事。住宅遺産トラスト関西理事。

実施日：平成28年6月18日(土)
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道

六甲山ホテル旧館の外観を見学した

午前の記念碑台は20℃で晴れ、行楽日和です。15名が環境整備でササ刈り。17名は散歩道を回遊し、六甲山ホテルの旧館を訪れました。外観を観察し、六甲山事情に詳しい森地 一夫氏から、写真パネルで解説いただきました。午後は43名が参加しました



森地さんから解説

宝塚ホテル・六甲山ホテル旧館の保存を提言

今年の2月に新聞紙上で、日本建築学会近畿支部が六甲山ホテル旧館の保存の要望書を阪急・阪神ホールディングスや神戸市などに提出されていることを知りました。早速、建築学会の事務局に講師派遣をお問い合わせし、中心人物の笠原さんをご紹介いただきました。笠原さんは建築史の研究者で、地元の灘区にお住まいです。建築遺産の保存・維持に、力を注いでおられます。今回は、六甲山ホテル旧館の素晴らしさに脚光を当てたお話をお願いしました。



保存の要望が大きく報道された

地域遺産を見直して保存することを啓発された

笠原さんは宝塚ホテルや六甲山ホテル旧館の保存を提起されています。午後の講演は「文化遺産としての六甲山ホテル旧館」をテーマに、体系的にお話いただきました。まず、昭和初期の六甲山をめぐる阪急と阪神の争いを紐解いて説明されました。六甲山ホテルの建設、ケーブルやロープウェイ、山上道路の開発、六甲山開発の勢いと熱気が伝わりました。続いて、六甲山ホテルの建築的特徴を詳しく説明されました。スイスやドイツなどヨーロッパの山岳地帯に見られる伝統的な建物の様式に基づいて、時代の流行のデザインも取り入れていること。専門家の目から見た外観や内装の特徴などを写真で詳しく解説されました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

旧館を建築した古塚 正治は阪神電鉄勤務後、早稲田大学に入り、宮内省勤務という経歴を持つ、阪神間で活躍した優れた建築家で、宝塚ホテル本館など数々の名建築を残しました。

1929年建設の六甲山ホテルは山小屋風のホテルの先駆で、同時代の上高地ホテルや雲仙観光ホテルに先立った存在でした。古塚 正治はホテル論で、六甲山ホテルを「遊興地及び季節を主とするもの」で、大衆の利用の必要も説いています。六甲山ホテルは、山小屋風ホテルの先駆けとなるデザインの大抵が現存し、古塚 正治の数少ない現存作品で、阪神間モダニズムの象徴となる貴重な建物です。問題の保存活用については、改修して耐震性を向上させることは十分可能なので、所有者の保存意欲を期待して終わりました。



六甲山ホテル旧館2階

人工の美を生かす文化を大切にしたい

六甲山ホテル旧館に注目して、建築物そのものの魅力はもとより、建築の時代背景や建築家のビジョンが表現されていることを学んだ。名建築を評価して維持活用するには、それを支える地域文化や愛着を持つ人々の存在が鍵になります。今あるものを大切に生かすことに尽力したいものです。

※詳しくは2ページをお読みください。

参加の感想 壺谷さん

建築設計を業とする私は、素晴らしい近代建築群が取り壊されている現状を憂いておりました。笠原先生は長きにわたり近代建築史を研究されており、村野藤吾氏の研究では、日本を代表する研究者の一人と言っても過言ではありません。本セミナーでは六甲山ホテル旧館を保存する意義を改めて認識できました。そして貴会やボランティアの方々の熱い思い、六甲山を愛する地域の皆様の笑顔に出会う事ができ、心が豊かになった一日でした。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、
コープこうべ環境基金、セブンイレブン記念財団